

312

輯四第料資員動總神精民國
(版藏省部文·省務内·閣内)

特255

770

日本精神の發揚

八紘一宇の精神

盟聯央中員動總神精民國

5_{セン}

38

23

6
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10^{16m}
1
2
3
4
5

始



特 255
170

目次

一、	國家・民族の興廢	七
二、	八紘一宇の精神	二
三、	支那事變の意義	七
四、	皇國の使命と我等の覺悟	一四
五、	社會風潮の一新	一八
六、	むすび	二三



八絃一字の精神

文 部 省

(一) 國家・民族の興廢

試みに世界史を繙いて、遠くはギリシヤ・ローマ、近世の西洋諸國の興亡の蹤を思へ。近くは東洋各國の盛衰の流を顧みよ。一國朝に蹶起し、潑刺たる創業の意氣と烈々たる愛國の精神とに燃え、國礎を新にしてその歴史・文華を營むも、夕には早創業の精神、愛國の心を喪ひ、忽ちに他國の乗ずるところとなつて、國家は亡滅し、歴史は斷絶し、文華は萎靡する。かくて一國の精神と傳統とのよく定立發展し、その粹を維持して今の日に至るもの尠く、一は他を以て替へられ、此は彼を以て斷たれ、その興亡盛衰の有様は一々應接に違がない。

而してこの涯しなき隆替と流轉の歴史は、現在の世界に見るが如き各國家の併存・對立となつて現はれ、各國は自國の發展と國民の福利の爲に日夜汲々として國家的經營の努力を續けて居るのである。この經營の進行するところ、遂に各國利害の摩擦・衝突となり、茲に國家と國家との血腥き鬭争が現出する。この鬭争は單に各國家間の武力對武力の局面に止まらずして、經濟・思想・文化等のあらゆる局面に亘つて展開されてゐるのである。かくて今日、世界は洋の東西を問はず、その對立と葛藤とを激化し、爆發せしめて、世界的紛擾の相貌を現出してゐる。

若しそれ斯の如きが世界の實相であるとすれば、終に世界史は國家と國家との無限の鬭争の繰返しに終るかも知れない。併しながら果して世界人類は、この悲しき鬭争を以て窮極の世界觀となして、その解決を斷念して居られるであらうか。又この鬭争は世界人類の避くべからざる宿命にして、如何に人力を盡しても克服することの出来ぬものであらうか。如何にも世界は、一面より見れば、確かに朝に興り夕に亡びる對立抗争の歴史であるが、又他面より見れば、各國が自立自存して他國と對立競争しつつも、常にその奥に世界人類の福祉を見出さんとする熱烈なる理想的精神を有するものである。この精神は、實に世界の常關を照らす恒星であつて、この光の消失せざる限り、世界人類は失望と破滅とより免れるを得るものである。併しながら現實の世界にこの聖なる恒星の照破するのがあるか。何處の國家、如何なる思想がこの恒星に値し、以て各國家をその鬭争的破滅の渦中より救出し、之に生命と秩序と平和とを與へて、その本來の歴史的使命に復歸せしむるを得るか。この現實と理想との深刻なる相剋こそ、現代の世界・國家に共通した悲哀であり苦惱である。全世界何れの國家が、果してよくこの恒星を見出し、國民全體をその昭々たる光のもとに動員し、以てこの重大なる歴史的任務を遂行することが出来るであらうか。是實に現代諸國家に課せられた世界史的問題である。

(二) 八紘一字の精神

大日本は萬世一系の 天皇皇祖の神勅を奉じて永遠に之を統治し給ふ。これ我が萬古不易の國體で

ある。この尊嚴なる國體を永遠の指標とする我が國民の精神は、時運を貫き隆々と榮えて窮るところがない。併し乍ら我が國と雖も現實の世界の裡に在り、各國家・各民族と共存して居る以上は、獨りこの世界史的問題に關係がないといふことはあり得ない。否、我が日本こそ諸國家・諸民族に率先し、萬死をも辭せざる不退轉の覺悟を以て、世界を鬭争と破滅とより救済する爲にこの難局に當らねばならぬ。然らば何故に我が國が率先してこの難局に當らねばならぬか。それは宇宙の大生命を國の心とし、之を以て漂へる世界を永遠に修理固成なして、生成發展せしめる我が天壤無窮の國體が、正に全世界を光被すべき秋に際會して居るが爲である。流轉の世界に不易の道を知らしめ、漂へる國家・民族に不動の依據を與へて、國家・民族を基體とする一大家族世界を肇造する使命と實力とを有するのは、世界廣しと雖も我が日本を措いては他に絶對にないのである。茲に我が國體の尊嚴と我が國家の不滅との深き根據がある。されば我が國體と國家とに對する自覺と體認とは、我々國民が現在直面せる支那事變の時艱を克服し、天壤無窮の宏謨を翼賛し奉り、以て世界救済の歴史的使命を果す最深最大の原動力である。

抑々我が國は他の外國とその根基・成立・精神・歴史等を本質的に異にして居る。それは、強者が多數の弱者を征服して自ら君主となつて打建てた權力國家でもなく、或は又多數の民衆が自己の利益の爲に相互に契約し、一人の代表者にその統治權を委任して成立せる約制國家でもない。我が國はかゝる人意の國にあらずして、神命に基き自然の理法に隨つて生成せられた國であつて、彼の北島親房

が「大日本は神國なり」と述べし如く神の國である。今これを我が神代の語事に徴し見んか、神國の面目躍如たるものがある。天地開闢の神靈、宇宙生成の原力は靈動生成して伊弉諾尊・伊弉冉尊に至り、一尊は天神、諸々の命もちて「この漂へる國を修理固成」なして國生み神生みの大御業をなし、終に天の下の主たるべき天照大神を生み給うた。天照大神の御稜威は「光華明彩しく六合の内に照徹らせ」給ひ、その大御光は萬物を遍く光被し、萬生を厚く育ていつくしみ給うた。祈年祭の祝詞に天照大神の御稜威を、

皇神の見霽かし坐す四方の國は、天の壁立つ極、國の退立つ限、青雲の靄く極、白雲の墜坐向伏す限り、……狭き國は廣く、峻しき國は平らけく、遠き國は八十綱打掛けて引き寄する事の如く、皇大御神の寄さし奉らば……

と稱美し奉りしが如く、地上世界を一角一隅と雖も洩しおとすことなく、無際限に又永遠に育ていつくしみ給ふのである。是實に世界を己の有とせずして而もそのまゝ一切を知らし給ふ大精神であつて、天地開闢の心、宇宙生成の力をそのまゝ大御心とし給うたものである。この宏大無邊なる大御心は、天つ日嗣の彌嗣々に歴代の天皇の大御心の裡に開顯せられ、我が國土に實現し、道義的・平和的・世界國家の建立を庶幾はれてやまないのである。天照大神のこの大御心は、遂に瑞穂の國に鍾り給ひて、豊葦原の千五百秋の瑞穂の國は、是れ吾が子孫の王たるべき地なり。宜しく爾皇孫就きて治せ。行矣。寶祚の隆えまさむこと、當に天壤と窮りなかるべし。

の神勅の渙發となり、皇孫瓊瓊杵尊の御降臨となり、更に神武天皇の御創業として發展し給うたのである。茲に皇位・皇統・皇國は不動の根基を得、敬神・崇祖・愛民の御稜威は高光り、神皇不二、君民一體、身士同胞の世界觀は搖ぎなく、祭政教一致の國風は愈々明らかに、忠君愛國・忠孝一本の臣節は彌々堅い。我々はこの語事と神勅とに徴して、天地開闢、宇宙生成の産靈が、悠久なる民族の生活と歴史とを通じて自然に國家の生命として發露し、萬世一系の皇統として顯現せられて居ることを知る。而も 天皇と國土と國民とが同一の生命的根基より生成した中心分派の大家族國家であり、且國土と國民とは、己の生み育ての御親たる皇神及びその現にまします 天皇に永遠に隨順奉仕して居るのである。されば親房が我が國の神國たる所以を敍して、「天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を傳へ給ふ我が國のみ此事あり。異朝には其たぐひなし。この故に神國と云なり。」と嚴肅なる一句を吐露したのは決して偶然ではない。又幕末の志士吉田松陰が我が神勅の精神を説いて「天照の神勅に日嗣之隆與天壤無窮と有之所、神勅相違なければ日本未だ亡びず、日本未だ亡びざれば、正氣重ねて發生の時は必ずある也」と道破したのは、獨り生成發展の國體の本義、一切萬生を育ていつくしみ給ふ皇祖の大御心を體得したのみならず、この國體を仰ぎ、この皇祖 天皇を戴く我々國民が、國家の常時と非常時とを問はず、萬世不易の國體に對する不動の信念を示したものである。惟うて茲に至るとき、皇祖の神勅は、天地と共に宏く富嶽と共に高く、三千年の國史を貫いて今日に存する。この宏謨の光被するところ、その國家・民族に廢墜なく、世界の流轉の裡にあつて而もその奥底に脈々たる不易一

一貫の道を堅持し、この國體の一貫するところ、この國民精神に萎靡なく時勢の變遷の裡にあつて而も昏迷せず、嚮ふところ常に皇運扶翼の一路があるのみである。この一路こそ我が國をしてこの時艱を踏破して無窮に生成發展せしめ、同時に全世界あらゆる國家をして各々その處を得、その分を竭さしめ、萬邦大和、真正なる世界平和を實現せしめる所以である。是實に神武天皇が皇祖の神籙に之を享けて、天つ日嗣の彌嗣々に萬世に傳へ給へる「八紘を掩ひて宇と爲む」と詔給うた「八紘一宇」の大精神である。

「八紘」は「八荒」ともいひ、前者は八方の隅、後者は八方の遠い涯といふ字義であつて、共に「世界の涯」とか「天の下」とか「いふ意味である。」「一字」は「一家」といふ字義で、全體として統一と秩序とを有する親和的共同體といふ意味である。従つて「八紘一宇」とは、皇化にまつろはぬ一切の禍を拂ひ、日本は勿論のこと、各國家・各民族をして夫々その處を得、その志を伸さしめ、かくして各國家・各民族は自立自存しつつも、相倚り相扶けて、全體として靄然たる一家をなし、以て生成發展してやまなといふ意味に外ならない。それは外國の霸道主義の國家に見られる如く、他國を領有しようとする侵略的思想とは、霄壤の差をなすものであつて、禍を除き、道を布き、彌々高く益々廣く向上發展する我が國の進路を示すと同時に、各國家・各民族をして道義的・平和的世界を實現せしめる創造の道を示したものである。この道は、實に肇國以來、一系連綿たる天皇の天津日嗣の大御業であり、又我々臣民が一身を捧げて皇運を扶翼し奉る窮極の目標である。

この大精神の炳として瑞穂の國の最中に輝き給ふや、時空を貫き、萬象に徹して、國家艱難の今に愈々正氣を發し、見よ、我々にその嚮ふところを覺らしめ、克難の活力を與へて居るではないか。この精神は、獨り我が國の依據すべきもののみでなくして、各民族・各國家一も餘すところなく依據し、以て眞の世界平和と人類共榮の實をあぐべき、中外に施して悖らず、古今に通じて謬らざる天地の大道である。我々は宜しくこの大道に和集し、「八紘一宇」の御旗を奉揚して、我が大君の爲、世界平和の爲、不撓不屈、千辛萬苦をも甘しとして時局の險路を突破せねばならぬ。

〔三〕 支那事變の意義

我々は、國家・民族の興廢と我が國體の大精神とを顧み來つて、今回の支那事變に直面する秋愈々事態の深刻にして且我々の任務の重大なるを痛感するのである。今回の支那事變たるや、實に國際的危局の面に畫き出された事件であつて、單獨に取離して考へることは出來ない問題である。而してこの事變は、數年前より現はれ來つた世界的非常時の情勢が漸次一觸即發の機に熟し來つて、終に引火爆發したものであつて、日支兩國家の衝突を當面の現象としつゝも、その奥底には各國家の複雑にして微妙なる勢力關係や思想關係を内包したものである。随つて逆觀すれば久しきに亘つて鬱積され來つた國際的非常時の趨勢が、東亞の天地を目かけて集注し、今日見るが如き支那事變として勃發したも

ので、その由つて來るところは實に深い根柢と大いなる廣表とを含んで居るといふべきである。茲にこの事變の國際的乃至は世界的重大性と複雑性が存する。又この非常時的趨勢が特に支那事變として勃發し我が日本の直面し、且對處せねばならぬところに、我が國の國際的危局に於ける重心的地位と世界的任務とがあるのである。かくて我が國は世界の何れの國家よりも深刻にこの危局を體驗し曩の滿洲事變以來今日の支那事變に至るまで、世界各國の鋭い視線を浴びつゝ、危局の打開に一路邁進して居るのである。

我々は茲に滿洲事變以來支那事變に至るまでの事態の趨向を究め、我が日本の立場と使命とを明確にせねばならぬ。

昭和六年九月十八日、奉天の近郊柳條溝に於てける支那東北軍閥の不法事件の勃發するや、我が國は三千萬滿洲民衆の至福の爲、且は東亞永遠の平和の爲、敢然正義の戈を執つて彼に一大鐵槌を下すに至つた。これが所謂滿洲事變である。而してこの事變は、單なる柳條溝事件に發端するものではなく、その根ざすところは遙か東洋史の深底に存するが、その一根は已に日清・日露の戦役に見受けられる。明治の中葉、清國は強大なる勢力を保持して韓國を併呑せんとし、茲に我が國と激突したが、我が皇軍の爲に大敗し、その野心を空しく黄海の底深く沈めるに至つた。かくて我が國は韓半島の安全を確保したが、三國干涉の結果、我は遼東半島を彼に還附するの止むなきに至つた。然るにその間、露國は、永年の民族的宿望たる南下政策のもとに、着々と滿洲を侵略して遂にその魔手を韓半島にのば

し、之を足場として我が國を侵略しようとした。韓半島の存亡は、實に我が國の死生の懸り存するところ、我は國威を發揮し、敢然蹶起して、或は滿洲に或は日本海に彼を破つて、世界史上燦たる大捷を贏ち得、遂に彼の侵略的野望を破摧したのである。

次いで我が國は東亞諸邦の道義的結合を目ざして、韓國と體を一にし、心を同じくすることになり、更に遼遠なる太古より、或は人種的に或は文化的に我と緊密なる關聯を有する滿洲の開拓發展に一路邁進して昭和の御代に至つたのである。かゝる間、明治四十五年には支那に革命が起つて清朝は滅亡し、之に替つて中華民國が生れ、爾來中華民國は、孫文の民族・民權・民生の三主義を一體とする所謂三民主義を國是として、國家を統一せんとするに至つたのである。この三民主義は支那の近代國家建設運動即ち國民主義運動の中心思想であると共に、排外運動として、殊に排日運動として發展しつゝあつた。この國策を繼承せる蒋介石の國民黨を根幹とする南京政府は、多年東北に蟠居せる軍閥、張學良一派を煽動して遂に滿洲よりその育ての親たる日本を除かうとした。是實に滿洲事變の眞因であつて、我が國は一は東亞の平和の爲、一は古き傳統を有する滿洲諸民族の爲、正義の鐵拳を振つて遂に東北軍閥をして滿洲より退去せしめたのである。續いて昭和七年の一月には、戦火は上海にも飛び、所謂上海事變となつたが、是亦我が軍の大捷に歸したことは周知の通りである。その間、滿洲は全面的に着々と肅清建設の工作が行はれ、同年三月滿洲の民衆は、古來滿洲と最も密接なる關係を有する前清國宣統帝溥儀氏を執政に推戴し、道德仁愛に基く民族協和の精神を國本として、茲に王道

樂土を建設すべく、新興滿洲國は雄々しき呱呱の聲をあげたのである。かくて滿洲國は、支那政府と永久にその腐根を斷ち、東北軍閥多年の惡政を芟除し、我が日本の援助のもとに、隆々と成長を遂げ、昭和九年三月一日、溥儀執政は皇帝の位に即き給ひ、以て滿洲國は建立せられ、燦然たる光を全世界に放つに至つたのである。この帝國の建立は、獨り東亞の禍根、張學良を中心とする東北軍閥を除いたのみでなく、東亞をして本來の傳統に復歸せしめ、東洋諸邦をして道義的結合を成就せしめるにあつたのである。然るに歐米の諸國及び支那は、この眞義を理解せず、國際聯盟は滿洲國を承認せず、因つて我が國は聯盟と所見を異にし、遂に彼と袂を別つことになつたのである。茲に於て我が國は、世界の霸道的國家の間に孤立し、自主獨往、東亞興廢の運命を雙肩に擔つて雄々しくも艱阻の道を踏出した。その間に、南京政府は、滿洲國の獨立を以て日本の帝國主義的侵略政策の致すところであるとの謬見を抱き又歐米諸國は、支那に於ける自國の權益を擴大しようとする功利的打算から、背後より支那を煽動操縦してこの謬見・迷蒙を更に助長したのである。かくて蔣介石の南京政府は自己政權の維持・擴大の爲に、失地恢復・排日を叫び、この趨勢の深化するところ、遂に反日となり、抗日となり、更に進んでは侮日となるに至つたのである。

惟ふに支那の排日は、單に滿洲事變を契機として始めて擡頭したものではなく、共和國宣言以來、孫文の三民主義に遠くその源を發するのである。殊に支那の革命統一運動の第二期即ち大正八年から同十三年頃の間、世界的異變たる世界大戰とロシア革命との影響を蒙つて、三民主義は國民革命運

動から一路排日運動へその動向を發展せしめたのである。即ち世界大戰の結果、有名なるウイルソンの民族自決主義が世界を風靡して、この影響は支那にも及び、大いに迎へられ、又ロシア革命の結果共產主義による帝國主義打倒の革命的思想は各國を震撼して、その震動は支那にも及び、その心底に深く喰込んだのである。而して民族自決主義は國民黨によつて、帝國主義打倒は中國共產黨によつて支持せられ、この二潮流は三民主義を基底としつゝ、相互に交流・合流して全國的に排外運動となり、その趨勢は漸次に激烈を加へ、遂に排日運動として明らかなる姿勢を現はすに至つた。かくて大正十三年一月、廣東に於て開催せられた國民黨第一次全國代表大會に於て所謂容共政策が採用されて以來、蔣介石を中心とする國民黨政府は、共產勢力を利用して排日・排日貨の運動の規模を益々擴大せしめ、或は國民黨及び政府の御用秘密結社たる藍衣社及びC・C・團をして、思想的に又は暴力的に、排日・排日貨の運動を促進せしめたのである。茲に於て「排日」は彼等の國家統一の手段となり、南京政府はこの旗幟のもとに蒙昧なる支那民衆を參集せしめ、これが爲にはあらゆる陋劣な手段方策を用ひ、恬として恥ぢざる有様であつた。或は教育機關を利用して、「日本は我等の仇敵なり」として反日感情・抗日意識を煽動し、純眞なる學童學生の腦裡に深く之を滲透せしめ、終には牢固として拔くべからざる信念にまで強化せしめ、今に至るまで實に十數年の永きに及んで居る。又或はラヂオ・映畫・新聞・ポスター・集會等を利用して、日本の惡宣傳をなし、一般民衆をして抗日意識を益々旺盛ならしめて居る。或は軍事訓練を利用して日本軍弱くして興し易しとの觀念を兵士の心底に扶植し、

抗日挑戰の盲目的な勇氣を養成して來た。その他、南京政府は本國全土に亘り軍備を擴張充實して軍事的統一を計り、英國の援助のもとに幣制を改革して財政統一を企てる等、益々積極的に抗日の準備を整へたのである。是隣邦の誼を忘却した態度であつて、實に天人共に許さざる陋劣沒義の行爲である。

かくて南京政府の策謀は進行するにつれて益々結果を現はし、支那本國は全く「排日・抗日」の一色に染汚せられるに至つた。一方この機に乗じて、支那に利権を有する歐米諸國の中には、この際日本の支那に於ける勢力を根柢より驅逐し、以て自國の權益を益々擴大強化せんとして、競うて南京政府に阿附し、物的或は心的に多大の援助を與へて、彼をして益々抗日の氣勢を熾ならしめた。又東亞の北邊に虎視眈々として東亞赤化の機を覗ふ「コミンテルン」は、秋正に到れりとなし、支那共産黨を使喚し、抗日人民戦線運動を益々推進せしめた。かくて支那全國は、裡に極めて複雑なる思想的・國際的の諸關係の錯綜を包容しつつも、外に向つては國力を所謂「抗日救國」の一點に集注し、その勢は熱狂的なるものがあつた。かゝる支那の情勢と國策とは全く東亞の平和を危くし、延いては東洋全局を混亂に導き、光輝ある東洋の道義的精神を破るものであつて、萬象をしてその處を得しめ、その生命を永遠に育ていつくしむ我が「八紘一字」の精神に戻るものである。茲に於て我は彼をしてその迷蒙を覺らしめ、且彼の先王聖賢の垂示した仁愛道義の本來に復歸せしめ、以て協和親睦、「アジャ」の更生に協力せしめる爲に、活人の劍を振つて、奮然彼を膺懲するのやむなきに至つた。是昭和十二年七月七

日、北平郊外の蘆溝橋事件を導火線として或は北支或は南支に亘つて勃發した支那事變の真相である。勿論我が國は事件の最初より不擴大方針のもとに、飽迄も現地解決を望み、隱忍に隱忍を重ねたのであるが、支那政府は之に對して不信と暴慢とを以て酬ひ、益々挑戰の態度に出たのである。事ここに至つては、我が國は止むを得ず、北支・中支・南支に忠勇無雙なる皇軍を送り、抗日勢力を徹底的に絶滅し、以て支那を更生せしめ、東亞百年の平和を確立する爲に、萬遺憾なきを期しつつ今日に及んで居るのである。

惟ふに支那と我が國とは同じく東洋の圈内に國家を營み、古來より所謂同種同文の國として、歴史的にも文化的にも、或は又經濟的にも緊密なる關係を結び、近世に及んだのである。殊に支那は永きに亘つて儒教・佛教の思想文化を我が國に傳へ、爾來この思想・文化は我が國に於て益々醇化され、始めてその本然の光を顯現するを得たのである。さすれば支那と我が國とは、滿洲國と共に實に一徳一心の歴史的或は文化的の使命を有するものであることは、何等疑ふべからざるところである。然るに蔣介石の南京政府は、この天賦の使命を覺らず、自國の性命を顧みず、我が帝國の眞意を解せず、徒らに歐米諸國に依存し、或は又怖るべき赤化勢力と抱合し、所謂「以夷征夷」の策を弄して、今日の事態を惹起せるは、東洋平和の爲、且は支那民族自身の爲、甚だ遺憾とせざるを得ないのである。畏れ多くも、去る九月四日、第七十二回帝國議會の開院式に際して賜はつた優渥なる勅語の中に、

帝國ト中華民國トノ提攜協力ニ依リ東亞ノ安定ヲ確保シ以テ共榮ノ實ヲ舉クルハ是レ朕カ夙夜軫念

措カサル所ナリ中華民國深ク帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘ遂ニ今次ノ事變ヲ見ルニ至ル朕之ヲ憾トス今ヤ朕カ軍人ハ百艱ヲ排シテ其ノ忠勇ヲ致シツツアリ是レニ中華民國ノ反省ヲ促シ速ニ東亞ノ平和ヲ確立セムトスルニ外ナラス

と仰せられた。大御心の宏大無邊、深く支那をいつくしみ、東亞の安定を御軫念遊ばされる程も拜察せられて、眞に恐懼感激に堪へない次第である。我々國民はよくこの聖旨を奉體し、我が國固有の武の精神を發揚して、抗日支那の禍根を徹底的に斷絶せねばならぬ。

〔四〕 皇國の使命と我等の覺悟

この非常時局に對する皇國の使命は、天地開闢の生成發展の産靈をそのまゝ國家の心とせる「天壤無窮」の道、即ち一切萬物を「いつくしみ育て」且永遠に之を「知らし」て、一物一片と雖も棄つることなく、その處を得、その志を遂げしめる「八紘一宇」の大精神に基くのである。この大精神、今日、この秋、三世を貫いてその正氣を發するところ、方に今般換發された勅語の御精神であつて、東亞の安定東亞の共榮、更に大にしては世界平和・人類共榮を目的とするのである。併しながら我が國の翹望する世界平和・人類共榮は何處までもその根柢に「八紘一宇」の皇道の本義を深く堅く具有するものであつて、彼の歐米流の個人主義・唯物主義等に基く便宜的・利己的或は抽象的・機械的なる平和平等の思想とは、全く本質を異にするものである。況や「ソ」聯邦の共產主義に立脚した革命主義に於てをや。

茲に於て我が國は、この「八紘一宇」の傳統に立脚する眞實なる世界平和・人類共榮を實現する爲、當面の抗日支那を徹底的に膺懲して、非道義的唯物思想と「コミンテルン」の赤化工作との傀儡になつて國民生活を犠牲にし、東洋平和を攪亂する國民黨政府及びその軍隊の非行と謬見とを祓ひ清めなければならぬ。先般我が國が、獨逸と日獨防共協定を締結したのはこれが爲である。而してこの思想的罪科を打破清掃して、支那をして光輝ある東洋の精神に歸らしめ、東洋的地盤より生成する眞の歴史・文化を創成せしむることこそ、實に皇國の世界文化史的使命にして且は「八紘一宇」の現代的使命である。

かく我等の使命を觀じ來る時、日本國民としての決意と覺悟とは明々白々である。我々はこの非常の秋に當つて、「八紘一宇」の御旗のもとに、老若男女を問はず、身分職業を問はず、國民一人たりとも洩すことなく動員して、國民精神の磐石不動なる統一を計るべきである。而もこの國民精神總動員の運動は、官命によつて強制實行せられるといふ受動的な心構からではなく、國民各自が崇高なる國體に對する自らなる渴仰隨順の至誠を、天皇に捧げ奉るといふ止むにやまれぬ大和魂の深奥から發露した運動でなければならぬ。かくてこの運動は、内に於ては我が國體と歴史とに貫通した恒久的な國民教化運動となり、國民の教育・思想・文化・政治・經濟等のあらゆる分野の健全な發展を促すと共に、外に發しては各國家・各民族の發展を妨げるあらゆる障礙を清掃する世界淨化運動となり、眞實なる國際正義を顯現することが出来るのである。殊にかかる非常時に際しては、この運動は極めて重大な

る意味を有するもので、銃後に於ける國民精神の統一の如何は直ちに我が皇軍の士氣に反映するのである。

これは我が國史の先蹤に照しても明白な事實である。古くは神功皇后の新羅御征伐を視よ。當時の我が國は、經濟的・軍事的には新羅に比して必ずしも勝れては居なかつた。それにも拘らず、古事記に「軍を整へ、御船を雙めて、度り幸でます時に、海原の魚ども大きな小さき、悉に御船を負ひて渡りき。こゝに順風盛りに吹きて、御船浪のまにまにゆきつ。故その御船の波、新羅の國に押し騰りて、既に國半まで到りき。こゝにその國王畏ぢ惶み云々」とある如く、刃に驚らずして易々と新羅を畏服せしめたのであつた。是もとより皇神の加護に基くといへ、士氣旺盛なる皇軍の背後に、我が國民が皇神を中心とする祭事によつて、如何に確乎たる精神的統一を有して居たかを物語るものである。更に下つて元寇の戦役を顧みよ。當時の元は我に百倍する程の強大な兵力を擁して、最北部と最南部を除くアジャの全部並びに東歐を己の版圖とし、この餘勢に乗じて世祖忽必烈は我が國を覬覦せんとしたのである。かくて我が國は文永弘安の兩役に互つて彼と激戦を交へたが、或は烈々たる鎌倉武士の精神を發揮して敵兵を斬滅し、或は神風の威を以て敵艦を覆没せしめて、終に再び神國を窺ふことなからしめた。この大捷は、我が神國の御稜威と鎌倉武士の力によることは勿論であると雖も、その背後には、戦時前後實に數十年の長きに互つて、上は龜山上皇・後宇多天皇を始め奉り、下は邊土の名もない國民に至るまで、眞に舉國一致、堅忍持久して、この金甌無缺なる國體を擁護し奉ら

んとした熾烈なる愛國心によるものであることを忘れてはならぬ。元寇の起るや、かの正傳寺の僧慧安(宏覺禪師)は石清水八幡に參籠して、蒙古降伏を祈つて、「日本六十餘州一切の天神地祇は到る所に垂迹し、威を振ひ、徳を顯はし外國の怨賊を斬り伏せ云々」の願文を献上し、凜々たる愛國の心を吐露した如き、或は又文永の役の翌年に執權北條時宗が敵を逆襲して、彼の地に渡らうと企てた時、肥後の住人井芹秀重入道西向が老衰の身を以て、一族郎黨を鼓舞して從軍を願ひ出でしめた如きは、當時の國民精神が神國意識のもとに、如何に鞏固なる統一を保持して居たかを示すものである。更に下つては日清・日露の兩戦役を思へ。この兩戦役に、全世界をして驚歎せしめる程の大捷を贏ち得た忠烈なる皇軍の銃後に、如何に我が國民が悲壯なる決意を以て上下心を一にして、之を支持したかは未だ我々の記憶に新なるところである。

惟うて茲に至る時、國家非常の時に於ては、銃後の護り、國民の眞の協力一致が、皇軍の士氣の原動力であり、戦勝の根源であることは明白なる事實である。されば銃後の全國民は、現在支那各地の戦線に立つ皇軍將兵諸士の心を心として、舉國一致、國家活動の各分野の護りを固めねばならぬ。若しこの銃後の國民精神にして、弛廢退嬰を來さんか、獨り皇國の勝敗のみならず、國家の前途たるや洵に憂ふべきものがある。我々はこの銃後の護りが即ち第一線であるとの重大性をよく自覺し、夫々の持場に於て全力を竭して、國力の根幹を深く培はなくてはならぬ。而もこの銃後の護りは、目前の戦争によつて激發せられた一時的の興奮からではなく、國體の奥底に自己存在の根柢を見出し、國史

の精神に我を没入せしめた、眞に永遠を求め、不朽を希ふ純平たる大和魂より發露したものとすべきである。かくて時局に處する國民精神は萬古不動の地盤に根を下すことを得、戰時如何に長期に亘ることも寸毫も弛まず、時艱如何に困難を加へるとも微塵も動ぜず、よく和協心を一にし、時艱を克服して義勇奉公の誠を致すことを得るのである。國民がこの銃後の護りの眞義を解し、その精神統一を持續して渝ることなければ、我が「八紘一宇」の御稜威は赫々と輝き昇り、皇軍の必勝は天日と共に昭々たるものがあらう。これに反して、萬が一に事變の中途にして銃後の護り、殊に思想戦線に於て弛緩を將來するが如きことあれば、國家全體の活力は鈍り、延いては皇軍の戦線にも影響を及ぼすことになる。是實に怖るべきことであつて、我々は深くこの點に注意せねばならぬ。彼の世界大戰に際して、獨逸は武力的戦線に於ては聯合軍に比して遙かに優勢であつたにも拘らず、終局には聯合軍に降らざるを得なかつたのは何に由來するか。實に獨逸國家の銃後に於ける思想戦線に弛緩を來し脆くも一敗地に塗れた爲である。翻つて思ふに、現下の支那事變は單に武力と武力との交戦に止まらず、實に現實の排日支那を背後に操縦しつゝある人民戦線乃至は共產主義思想及び帝國主義的思想と我が「八紘一宇」を生命とする國民思想との交戦である。この意味に於て、この日支の戦闘は世界思想史上に重大なる一齣を標置するものであつて、皇國の世界的使命の懸り存するところである。

〔五〕社會風潮の一新

古より我が國は「神ながら言擧げせぬ國」である。これは只管神命のままに隨順し、之を奉體して、生活の上に實踐・實現するといふ意味で、特に不言實行を重んずる國民性を反映したものである。我々は皇國の使命を自覺し、我等の覺悟を明確にしたが、これは宏謨翼贊の道として、我々の日常の業務と生活との上に、直ちに具現せられねばならぬ。去る九月九日の内閣告諭號外の中に、

凡ソ難局ヲ打開シ國運ノ隆昌ヲ圖ルノ道ハ我が尊嚴ナル國體ニ基キ盡忠報國ノ精神ヲ益々振起シテ之ヲ國民日常ノ業務生活ノ間ニ實踐スルニ在リ今般國民精神ノ總動員ヲ實施スル所以モ亦此ニ存スとあるのは、正に之を告示したものである。如何に崇高なる理想でも唯徒に之を叫ぶのみで、眞摯なる實踐躬行を伴はない時は單なる夢想に過ぎない。眞實なる理想は、必ず眞摯なる實踐の裡にのみ生きたるのである。我が「八紘一宇」の精神も國民一人一人の日常生活の上に實踐せられて、始めて眞の光と力を發揮することが出来るのである。

然らばこの崇高なる精神は、この時局に當面して、我々の日常生活の上に如何に具現さるべきであるか。その實踐目標は多々あるが、重なるものは、社會風潮の一新、銃後の後援の強化持續、非常時經濟政策への協力、資源の愛護等である。これらの目標は、「八紘一宇」の精神が我々臣民の皇運扶翼の道として、この非常の秋に自己を顯現したものであつて、我々は夫々の分と業とに應じ、全身全靈の力を以て、これに向つて突進せねばならぬ。而してこれらの目標は、相互に關聯しながら、全體としては國民精神の振興に密接なる關係を有するのであるが、特に社會風潮は國民精神と緊密不可分

の關係を有するものである。兩者は相互に表裏・因果の關係を保つのであつて、社會風潮の一新なくしては、健全なる國民精神の發達は到底望まれず、又國民精神の振起なくしては、健全なる社會風潮を馴致することは出来ない。我々は非常時局に於ける國民教育上より見て、特に社會風潮の一新に留意する必要がある。

而して之を日常生活の上に實踐するには、先づ第一に、堅忍持久の精神の涵養に心掛けねばならぬ。即ち今後相次いで起るべき幾多の難局を斷乎として克服し、打開する不動の精神を鍛鍊し、戦局が如何に擴大し、戦時が如何に延長するとも、皇神の加護ある皇軍の大捷は必定であるとの牢固なる信念を堅持し、又流言蜚語に迷ふことなく、國家の機密を守り、防空訓練を怠らず、常に對敵心構への訓練をなすこと等に心掛けることである。第二に、困苦缺乏に耐ふる心身の鍛鍊に心掛けねばならぬ。即ち時局が如何に困難を加うることも、千辛萬苦によく耐へて、之を打開するに足りるだけの剛健なる心身を日常に鍛鍊し、或は又奢侈を戒め冗費を除き、勤儉力行の風を弘めて、國家經濟力の基を深く培ひ、更に國民精神を消磨荒蕪せしめる享樂を斷つて、質實なる國民生活を營むやうに心掛けることである。我が國は古來幾度か難局に遭遇したが、その都度、御稜威の下に一致協力し、如何なる困苦缺乏にも耐へて難難を突破し來つたことは國史の示すところである。この意味に於て今度の難局は、實に我々がよく祖先の光輝ある精神を繼承して、この實を發揮し得るか否かの試金石である。第三に、國民各自がその職分を忠實に恪循するやうに心掛けねばならぬ。かゝる非常時の際には、とも

すれば所謂戰時的興奮に驅られて、自己の職分を忽せにし易いものであるから、國民各自はあわてず騒がず、終始沈着を守り、その職分を全うし、常時よりも一層精根をこめて働かねばならない。畏くも明治天皇の御製に、

國をおもふみちにふたつはなかりけり

軍の場にたつもたゝぬも

と御詠遊ばされてあるのは、この道理を諭し給はれたものと拜察せられる。第四に、國家活動の各分野の指導者階層に屬する人々が、時局に處する正しき道を、躬を以て一般國民に示す熱意をもつやうに心掛けねばならぬ。例へば、職を官公衙に奉ずる人々、經濟金融を擔當する人々、學術の研究、國民の教育に任ずる人々、或は文藝・藝術に携る人々が、よく我が皇國の使命を體認し、時局に對する正しき認識をもち、自から率先して國民一般に範を示し、之と共に眞に一心一體となつて皇運扶翼の實を擧げることである。

最後に、以上の全一的なるものとして、小我を超えて大我に生きるの精神を體現するやうに心掛けねばならぬ。換言すれば、我の由つて來る歴史傳統の大生命即ち「八紘一宇」の純乎として純なる日本精神に歸一し、滅私奉公の精神に生きることである。かゝる非常の秋に當つて國民が區々たる我利・我見に膠着沈溺して難局に直面するとすれば、時局に對して正當なる判斷を下すを得ず、大義名分を誤り、延いては國論を不統一に導き、果斷なる國策の遂行を妨げ、遂に收拾すべからざる事態に陥る

惧がある。須らく我利・我見を掃清し、和協心を一にして天下の大道に就くべきである。幕末の志士横井小楠が「方今の天下危機に迫れり。……其の本に反りて私心を去り、天下と共に事を爲すの心にならば忽に治まるべし。」と幕末非常時局に際して世人を嚴戒した言葉は、今日の我々をも亦訓戒する思があるではないか。

斯くの如くして、我々は「八紘一宇」の日本精神を宏謨翼贊の道として、日常生活の上に具現して社會風潮の一新を計ると共に、この後益々恤兵・國防獻金・出征者の家族扶助等に十全の努力を拂ひ、進んで非常時經濟政策への協力をなし、更には資源の愛護に努め、眞に物心一如の國力の増進に勇往邁進せねばならぬ。

かくすることは、獨り我が國をして時艱を突破して、生成發展せしめるのみでなく、この充實された國威と國力とを全世界に偏く滲透せしめ、之に生命を與へて、以て共存共榮せしめることにもなるのである。茲に於て、「八紘一宇」は皇運扶翼の道であると共に、世界平和を實現する道である。故に我々國民は皇運扶翼といふ熱烈なる「忠」の精神に生きることに於てのみ、眞の世界平和を達成することが出来るのである。社會風潮の一新といふことも、「八紘一宇」の精神を國民の宏謨翼贊、盡忠報國の臣節として實踐化したものであつて、この實踐を通じて、我々は今日この時、直ちに國體の眞髓と宇宙の生命とに參ずることが出来るのである。

〔六〕むすび

以上に於て、我々は先づ民族・國家の興亡と世界の流轉の相を眺め、これより必然せる世界的不安なるものの根柢に思を潜め、更に之を救ひ導く光として、生成不易の國日本、八紘一宇の國日本の精神を究明し、且之を昂揚するところがあつた。次にこの精神に立脚して、我が國が直面せる非常時局の由來と支那事變の意義とを考察し、更にこの時艱に對する皇國の使命と銃後に處する我等の覺悟とに就いて自省自戒するに及び至つたのである。

かくて言々説き來るところは多しと雖も、之を約すれば次の一句に窮まる。
「八紘一宇」の御旗の下に蹶起せよ。

この一片の丹心、烈々として全國民一人一人の胸に燃えさかる時、國民精神總動員は天地をも搖がす眞の迫力を持ち、この時艱を克服することが出来るのである。大君のしこのみ楯として砲煙彈雨の戰場に身を曝す皇軍諸士はもとより、銃後に於ける思想・文化・教育・金融・生産・内治・外交等の武力以外の國防の第一線に立つ全國民が、一人も洩れなく、この「八紘一宇」の御旗の下に、眞に打つて一丸となり、萬死猶甘しとして進むところ、遂に敵なく、一草一木の微に至るまで皇化に靡きまつるひ、かくて新なる世界の曙光は極東日本より登り出するであらう。

起て！ 國力總動員のために！
翻へせ！ 八紘一宇の御旗！

昭和十二年十二月一日印
昭和十二年十二月四日發行
昭和十三年二月十日再版發行

八紘一宇の精神

編輯者

內閣、內務省、文部省

發行者

東京市麹町區內幸町二ノ一
舊貴族院內
瀨尾芳夫

印刷者

東京市麹町區麹町五ノ二
杉田彌太郎

發行所

國民精神總動員中央聯盟

東京市麹町區內幸町二ノ一(舊貴族院內)

電話銀座(57)
六六二四九番
六七七四九番
七七七三番

行印所刷印屋田杉

終

0
9
7